

# 情報リテラシー実践Ⅰでの授業評価（SE）の結果

情報教育検討部会会長  
大学教育センター教授

永井 正洋

## 【はじめに】

本稿では、2008年度から2011年度までの前期末に行った情報リテラシー実践Ⅰに関しての、授業評価アンケート（SE）の経年変化などについて報告する。

平成17年度に首都大学東京が設立されてから、新しい情報科目「情報リテラシー実践」が設置されたが、本年度で7回目の実施となった。平成24年度からは、情報リテラシー実践Ⅰに関して、新設科目が置かれるため、授業評価アンケート（SE）の経年変化を比較的容易に調べることができるのは本年度までである。

さて、平成18年度から、入学してくる新入生の高等学校までの情報リテラシーを測るために、レディネス調査を毎年、行ってきた。この調査は主観調査（意識調査）と客観調査（テスト）からなるが、主観調査では、年々、学生の“できる”という意識の向上は見られるものの、多くの項目で肯定的意識が50%を超えていない。したがって、未だあまり自信のない状態にあるといえる。更に、客観テストの結果は、他大学の平均と比べ有意に低い得点を示しており、このことから、本学入学時には情報リテラシーが必ずしも十分に備わっているとはいえない。

これに鑑み、これまで情報リテラシー実践Ⅰでは、基礎・基本を重視した内容で、授業を構成し、情報教育を行ってきた。しかしながら、高度情報化社会の進展と各部局からの要請もあり、前述したように来年度から、より専門性を高めた授業として、情報リテラシー実践ⅠA（表計算ソフトを利用した統計処理）とⅠB（表計算ソフトを利用したプログラミング）という新たな科目を設置することになった。これとともに、これまでの基礎的な情報活用の実践力の育成を主眼とした情報リテラシー実践Ⅰも、支持する声が大きいのが残し、これら3科目の中から1科目を選択必修として、学部・系・コースで選択し、決定するカリキュラムに生まれ変わるようになっていく。

この新しい情報リテラシー実践Ⅰの科目群の構成は、授業評価アンケート（SE）の結果も考慮されているが、後述する「結果と考察」にて説明したい。

## 【方法】

まず、SEの質問項目だが、共通項目が問1～8、個別質問項目が問9～12となっている。この個別質問項目は、情報教育検討部会にて設定されるが、2010年度と、それ以前とは異なっている。次に回答方法に関しては、4年間とも、eラーニングシステムを用いてアンケートを実施しているが、SEでのシステム利用のクラスの割合は89.7%（2008年）、97.3%（2009年、2010年、2011年）となっており、ほとんどのクラスで利用されている。（紙面の関係上、SE：学生による授業評価のみ）。

### 【2008年度】（SE）

実施時期：2008年7月7日～7月22日

対象：首都大学東京 情報リテラシー実践Ⅰ受講者

回収数／人数：1,493人／1,755人（85.1%）

方法：BlackBoard(35クラス)、マークシート(4クラス)

### 【2009年度】（SE）

実施時期：2009年7月6日～7月23日

対象：首都大学東京 情報リテラシー実践Ⅰ受講者

回収人数／全人数：1,376人／1,722人（79.9%）

方法：BlackBoard(37クラス)、マークシート(1クラス)

### 【2010年度】（SE）

実施時期：2010年7月9日～7月22日

対象：首都大学東京 情報リテラシー実践Ⅰ受講者

回収人数／全人数：1,458人／1,681人（86.7%）

方法：BlackBoard(37クラス)、マークシート(1クラス)

### 【2011年度】（SE）

実施時期：2011年7月11日～7月25日

対象：首都大学東京 情報リテラシー実践Ⅰ受講者

回収人数／全人数：1,451人／1,689人（85.9%）

方法：BlackBoard(37クラス)、マークシート(1クラス)

## 【結果と考察】

図1は、主に2008年度から2011年度前期末に行った情報リテラシー実践Ⅰに関しての授業評価アンケート（SE）の共通項目に関する経年変化を表している（本稿では2007年度データは使用していない）。授業の全

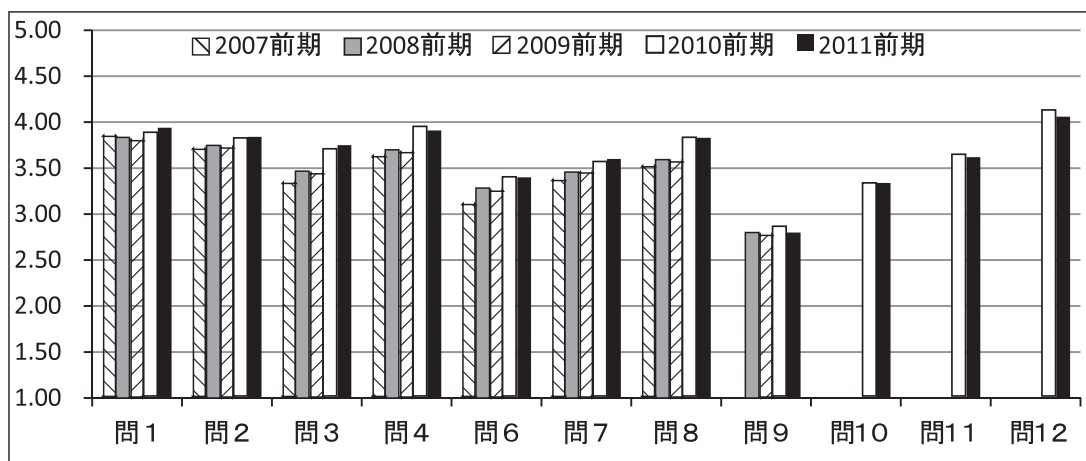


図1 2008～2011年度SE回答の経年変化

問	内容	平均値	標準偏差	0%	20%	40%	60%	80%	100%
問1	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。 (態度)	3.94	0.87		25.5%	51.2%	16.7%	4.9%	1.7%
問2	授業の目的を意識しながら学習することができた。 (意識)	3.84	0.85		19.6%	53.6%	20.2%	5.0%	1.6%
問3	教員の説明はわかりやすかった。 (説明)	3.75	1.05		25.0%	42.8%	19.0%	9.1%	4.1%
問4	教員は学生の質問・意見に対して適切に対応していた。 (対応)	3.91	0.99			30.0%	43.5%	17.5%	5.7%
問6	成績評価方法について十分な説明があった。 (成績)	3.40	1.02		13.9%	33.9%	34.4%	13.4%	4.4%
問7	シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた。 (成果)	3.60	0.83		10.9%	47.7%	34.4%	4.7%	2.4%
問8	私はこの授業を受講して満足した。 (満足度)	3.83	0.96			24.1%	46.8%	20.4%	5.6%
問9	授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？ (難易度)	2.80	0.94	4.8%	12.6%	49.1%	24.6%	8.9%	
問10	教材等の使用が授業の理解に役立った。	3.34	1.04		12.2%	33.4%	37.8%	9.4%	7.2%
問11	授業全体を通して、情報リテラシーが身に付いた。	3.62	0.88		11.0%	52.9%	26.7%	6.1%	3.3%
問12	チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応していた。	4.06	0.86			33.1%	46.2%	16.3%	3.0%

データ数=1,451

■ 5.強く思う (問9のみ) ■ 5.易しかった ■ 3.ちょうどよかった □ 2.やや難しかった ■ 1.難しかった  
 □ 4.そう思う ■ 3.どちらとも言えない □ 2.そう思わない ■ 1.全くそう思わない

図2 2011年度SE結果

一般的な評価ともいえる「満足度（問8）」が、2011年度は2008年度と比べ高まっていることが分かる。教員の学生への「説明（問3）」と「対応（問4）」に関しては、上昇傾向が見られるが、このことは教員の授業に対する意識の改善と教育技術の向上によるものではないかと推察され、前述した満足度へ影響しているものと考えられる。

次に、図2は2011年度前期の結果であるが、「難易度（問9）」に関しては、「5. 易しかった」と「4. やや易しかった」で17.4%であり、「1. 難しかった」と「2. やや難しかった」で33.5%となっていることから、学生にとっては、どちらかというとも難しいと感じる授業内容であったことが分かる。また、図1の「成果（問7）」

が他の項目と比べ、特段高い状態でないことを勘案すると、現行の基礎的な情報リテラシー実践Ⅰは、未だ必要性があると考えられ、来年度以降も一つの科目として、実施される予定となっている。

最後に、ここ数年間、課題として認められるのは、授業時間外学習の不足である。本年度の調査結果（問5）では、「ほぼ0分」が60.7%、「30分程度」が21.5%、「60分程度」が10.8%、「90分程度」が3.9%、「120分以上」が3.2%となっており、単位制度の実質化の観点からも改善が必要であると考えられる。これに対して、現段階では、自学自習用の教材としてeラーニングのコンテンツを開発・整備することを検討しているが、いずれにしても何らかの方法で、学習の機会を保障していきたい。